四

その夕餉には、尾頭付きの鯛が出た。

笹塚孫一と六間堀で会ってから三日目の夕刻のことだ。

磐音も南町奉行所の役人たちも野晒しの仲蔵一味が襲来するのを淡々と待ったが、その気配はなかった。

「今日はまた馳走でござるな。なんぞ嬉しきことでもございましたかな」

「余計なことは聞かぬものじゃ。今晩あたり、現れそうな気がするでな、気を抜くでない」

「畏まりました」

磐音は膳を抱えて小屋に引きこもり、尾頭付きの鯛と潮汁で飯を食した。

井戸端でいつものように洗い物をしていると、納屋の竈から勢いよく煙が立ち昇っていた。そして、格子戸の隙間から湯気が洩れてきた。

磐音は小屋に戻ると、一刻余り様子を見た上で、隣家の瓦屋の敷地へと闇の中を忍んでいった。すると瓦屋の庭に引きこも荒れた水路に苫舟が舫われていた。

「坂崎にございます」

磐音がそう囁くと、苫舟がわずかに揺れた。

「笹塚様にお伝え下さい。ひょっとすると今晩、現れるやもしれませぬ」

「そのような兆候がございますので」

木下一郎太の声が囁き返した。

「尾頭付きの鯛が夕餉の菜に出ましたし、外から窺ってのことですが、おとくの行動がいつもと違うように思えます。なんぞ覚悟があってのことかと思いましてな」

「承知しました、笹塚様に伝えます」

磐音は再び庭伝いに小屋に戻った。それから半刻後、納屋の戸の開けられる音がして、戸口の前で洗い髪のおとくがじっと小屋を窺い、磐音が見張っているかどうか様子を見ていた。

磐音も小屋の戸を開き、黙したまま手をひらひらと振ってみせた。するとおとくは屋内に姿を消した。

夜半近く、磐音は夜具を肩から外すと、畳んで小屋の隅に積んだ。そうしておいて小屋を出ると、かねてから目をつけていた松の大木に攀じ登った。

太い枝に跨ると、下から見えないように身を隠した。

そんな姿勢で両手の拳を握ったり開いたりして、手が悴むのを防ぐ。

夜半過ぎ、史吉が来た。

これまでもなんどかあったことだ。

だが、この夜は、一刻を過ぎても史吉は戻る様子を見せなかった。

八つの時鐘が響いてきた。さらに四半刻、何事もなく過ぎた。

異変はふいに起こった。

磐音が寝泊まりしていた小屋を囲むように人影が現れた。一気に戸を開き開けると、抜身を閃かせて突っ込んでいった。

無論小屋は蛻の殻だ。

外の騒ぎに逸早く納屋の中の二人も気付いた。

おとくは、とろとろとした囲炉裏の火から戸口を見ると、父親の鯛造が大磯村に残していった形見の長脇差を引き付けた。

同時に史吉も懐の合口に手をかけた。

だが、野晒しの仲蔵たちはすぐには押し入ろうとはしなかった。なおも庭を見て回り、辺りの様子を丹念に探った。

磐音は松の木の上から小太りのことこが手を振ったのを見た。

表口と裏口、野晒しの仲蔵の一味は一気に納屋の中に躍り込んだ。

「まっていたよ！仲蔵」

洗い髪を背に束ねて垂らしたおとくは、黄菊を散らした友禅染の小袖を粋に着こなし、着流しの腰にきりりと帯を締めていた

老婆から一転した姿には、女盛りの妖艶さが漂っていた。そして、ある決意が顔に漲っていた。

「おとく、史吉を誑し込んでなんの真似だ」

縦縞の裾を絡げ、股引に手甲、道中羽織を着込んだ野晒しの仲蔵の腰には、長脇差が差し落とされていた。

「なんお真似とは、お笑い種だ。おまえはお父っつぁんや伴吉さんたちを売りやがったな」

「なんでえ、六年も前の一件けえ。確かに南町に垂れ込んださ。盗人に入って、どこの馬鹿が蔵の金を半分残していくものか。おめえの父っつぁんの独りよがりに、おれたち手下は危ねえ目を見ながら、いつも銭に泣いていたぜ」

「仲蔵」

と史吉が口を挟んだ。

「鯛造親分は、手下たちの行く末を思って、盗んだ金を貯めておられたのだ。きっちり四千八百両貯まったら、十六人の一統が三百両ずつ分けて堅気に戻る。それが親分と手下たちの約束ごとだったはずだ」

「史吉、てめえは、捨て犬が飼い主を探すようにおれに近づいてきやがったな。だれぞの身内か」

「おめえに密告されて三尺高いところに首を晒した伴吉の倅よ」

「大方そんなこったろうと思ったぜ。おめえは、おれっちをおとくのもとに引き寄せたと思っているかもしれねえが、今宵は預けてあった四千両、そっくり貰いに来たのさ」

「風の便りに聞くと、お父っつぁんは町奉行所で、盗んだ金は暫く預からせてくだされと願ったそうな。四千両は確かにこのおとくが預かってきたさ。だが、こいつばかりは、おめえの命と引き換えだよ」

おとくが啖呵を切った。

「笑わせちゃいけねえぜ。女と半端者の二人でどうしようってんだ」

「先生！」

おとくが外に向かって叫んだ。

「おめえが頼りにしている浪人者は逃げ出して、もぬけの殻だぜ」

おとくが悲鳴を上げた。

「史吉を切り刻め。おとくは捕まえて体に隠し金の在処を吐かせるぜ」

仲蔵の命に野犬のような男たちが、

「おうっ！」

と叫び、二人を囲むように囲炉裏の切られた板の間に飛び上がった。

「史吉さん、こうなりゃあ、お父っつぁんらの仇をあたしたち二人で撃つよ」

「姐さん、心得た」

「おとくを好き放題にしていいぜ」

仲蔵が再び非情な命を発し、血に塗れた手下どもが応じた。

「合点承知だ」

髭面の手下が抜身を振り翳したとき、裏戸から夜風が吹き込んだ。そして、磐音がうすっと入ってくると、

「野晒しの仲蔵どの、私は逃げ出したわけではありませんよ」

とのどかな声を発した。

かねてから用意の木刀を手に提げた姿は、春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫のように、まるで手応えがなさそうに見える。

「おれの名前を知ってやがるてめえは、いってだれだ」

「おとくどのから頼まれた用心棒ですよ」

磐音は笑顔を囲炉裏端のおとくに向けた。

「おとくどの、おばばどのの姿より今のほうが何倍も艷やかで美しゅうござる」

「お、おまえさんは……」

「ご心配には及びません。手当をいただいている以上、務めを果たします」

「くそっ、こいつから叩っ斬れ」

仲蔵の命に、板の間の上がり框にいた男が合口を逆手に持って磐音に襲いかかった。

その動きは、鷹が獲物の小鳥を狙うように素早く、剽悍だった。

提げられていた磐音の木刀が躍った。

ふいに息を吹き込まれたように変身した磐音の木刀が、躍り込んできた男の下半身をのびやかに叩き上げた。

ぐえっ！

男の体が虚空に跳ね上がり、手にしていた合口が飛ばされていた。

が、次の相手が合口を腰だめにして突っ込んできた。

磐音が振り上げた木刀を反転させる間も与えないほどの連携だ。

磐音は、内懐を抉るように突っ込んできた切っ先を、すんでのところで躱した。が、切っ先は、袷の胸を切り裂いて、かたわらを駆け抜けていった。

気配ですでに反転させていた木刀を、第三の男へと振るっていた。

がつーん！

見事に眉間を叩いた木刀が音を響かせるや、長身の男がくたくたと体を揺らして板の間に転がった。さらに左右から二人ずつ、長脇差と合口が閃くのを見た。

磐音は、長脇差の男へと踏み込みざまに木刀を脇腹に叩きつけ、片足立ちに反転すると、背後に追い縋ってきた合口の男に、車輪に回していた木刀を振るった。

木刀が、飛び込んできた男の脛を叩いて転がした。

一瞬の内に四人の襲撃者が動きを止められて倒れていた。

「おとくどの、いましばらくお待ちくだされ」

おとくとかたわらの史吉は、息を呑んでただ突っ立っていた。

磐音の視線がゆっくりと野晒しの仲蔵に移動していった。

「仲蔵どのの背にはしゃれこうべの彫り物があるそうですね」

「てめえは、町方の隠密か」

「いえいえ、深川六間堀の裏長屋に暮らす浪人者にござる」

「その口、許せねえ」

仲蔵が長脇差を抜いた。

残った山陰が親分に呼応するように陣形を組み直した。

「行くぜ！」

仲蔵の声に二人が動いた。

左右の斜め前方から同時に合口が閃いて襲ってきた。

引き付けた磐音の木刀は、左の男の手首を撃ち、さらに右手の男の脇腹を叩いていた。

一呼吸で打つ直心影流佐々木玲圓道場直伝の連続技だ。

二人が板の間と土間に転がった。

七人目の手下は立ち竦んで動けない。

「幹八、てめえは」

と吐き捨てた仲蔵の長脇差が横手に閃き、幹八の首筋を撫できっていた。

磐音は予想もかけない仲蔵の残虐ぶりに呆然とした。

幹八は体を捻って仲蔵を見ると顔を歪め、

「お、親分」

と呟くと倒れこんだ。

「仲蔵、お、おまえという奴は」

おどくがそう言うと絶句した。

「おとく、上方で非道働きの野晒しと恐れられた仲蔵だ。役立たずに、鯛造だろうが幹八だろうか、同じ道を辿るのさ」

と吐き捨てた仲蔵が長脇差を右手にたてるように構え直した。

磐音は木刀を正眼につけた。そうしておいて、

ぐいっ

と踏み込んだ。

磐音の構えからは、いつもの春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫ののどかな気配が消えていた。

消させたのは仲蔵の残虐非道びりだ。

「どさんぴんが！」

顔を歪め、磐音に向かって片手斬りに襲いかかった。

木刀が長脇差に擦り合わされて弾くと、されに一転して仲蔵の脇腹を叩き、おとくと史吉の前によろめかせた。

「おとくどの、父上の方だを討つのだ」

磐音の言葉におとくが、

「はっ、はい」

と答え、鯛造譲りの長脇差を両手に握り締めて、

「お父っつぁんの仇！」

「うううっ」

仲蔵が身を捻って、まだてにしていた長脇差をおとくに振るおうとするのを、

「仲蔵、地獄に落ちな！」

と叫んだ史吉が合口を背に刺し通した。

二本の刃物で繋がれた三人の男女は、しばらくその姿勢でじっと睨み合っていた。

だが、仲蔵のてからまず長脇差が床に落ち、体ぐらりと揺れて、史吉が、さらにおとくがよろよろと後退すると、長脇差と合口を突き立てられたままの仲蔵の体が囲炉裏端に崩れ落ちた。

「お見事でござる」

磐音が言い差したとき、表と裏から南町奉行所の捕り方たちが雪崩れ込んできた。

その先頭には、家紋入りの陣笠を被った大頭与力の笹塚孫一が指揮十手を手に立っていた。

木下一郎太ら同心、小者たちは、磐音が倒した野晒しの一味を次々に捕縛し、怪我をした者を保護し始めた。

「終わったか」

「終わりましてございます」

笹塚と磐音が言葉を交わし、おとくが、

どさり

と板の間にへたりこんだ。そして、視線が磐音に向けられた。

「おまえ様は、どなたですか」

「おとくどのもご存じの金兵衛長屋の住人にございます」

おとくの目が笹塚に向かい、両手を腹の前で重ねた。

「お父っつぁんの仇を討った今、思い残すとはありません」

史吉も床に座し、両手を差し出した。

「おとくどの、史吉どの、親の仇討ちは、幕府も認めている。正直に笹塚様に話せば、なにも恐れることはありませんよ」

磐音の言葉はいつも長閑な銚子に戻っていた。

磐音が六間湯の石榴口を潜ると笹塚孫一の大頭が湯に浮かんで、その口から浄瑠璃の声色がこぼれていた。

客が少ない刻限で石榴口の中は笹塚だけだ。

騒ぎの朝から丸三日が過ぎていた。

「南町の知恵者与力どのは、えらくご満悦ですね」

「未解決であった事件が決着を見たのだ。気分が悪かろうはずはない」

「それだけでなさそうですが」

磐音の問いをはぐらかすように、

「野晒しの仲蔵め、大阪で非道働きを繰り返していたのを、史吉に釣り出されるように江戸に舞い戻り、昔の仇を討たれたのさ」

「手配がございましたか」

「大阪の奉行所からの手配には、野晒しの名がなかったゆえ、霜夜の鯛造の残党の仕事とは、結び付けられなかったのだ。これで大阪の一連の押し込みと六年前の懸案が一挙に解決した」

「おとくと史吉はいかがしております」

「鯛造は、むすねのおとくを押し込み仲間に引き込んではいなかった。史吉は、つなぎ役程度の半端仕事をやらされていたようだが、仲蔵の裏切りの後、おとくのいる大磯村に逃れて、急を告げている。おとくが父親の最期を知ったのも、親の仇をと策を練ってこられたのも、望む結末を迎えられたのもお、史吉がいたからじゃ」

「でございましょうな」

「そこでお奉行と相談の上、二人を放免した。今頃は二人して、東海道を大磯村に下っておろう」

「それは良うございました」

磐音は両手で顔を洗い、

「ところで霜夜一味が盗み貯めた金子は見付けられましたか」

と訊いた。

「ああ、あれか。おとくの証言で隠し場所が分かった。昔、鯛造一家が住んでいた上駒込村の百姓家の床下から出てきた。鯛造は、その家を大家の百姓から買い取って、おとくの名義に替えていたのだ。おとくは、隠し場所があるとしたらあそこしかあるまいと、文吉と二人、探し当てていたのだ」

「それはようございました」

しばらく笹塚からは言葉が返ってこなかった。

仕方なく磐音が訊いた。

「霜夜の一味が何年もかけて貯めた金、丸々残っておりましたか」

「それだ。鯛造はこまめな男でな。年余の押し込みに三千八百七十両ほど貯めていたことを書き付けに残していた。むろんどこの見せからいくら奪い取り、いくら次の仕事に仕込みに費消したかも書き留めてあった」

「三千八百七十両というのは隠した金の実高ですね。なんとみ律儀な盗人でございますな」

「盗人のなかには、自らの仕事ぶりを誇るために時に書き残す輩もおらんではない。だが、鯛造のように、掛かった入費まで書き残した盗賊は少ない」

「目標の四千八百両に達し、一味で分配するときに揉め事が起きないようにでございましょうな」

「そんな配慮も野晒しの仲蔵のような悪党に形無しにされた。もっとも奉行所にとっては、鯛造のような押し込みも仲蔵のような盗人も罪人には変わりない。見逃すわけにはいかないということよ」

そう言った笹塚は、

ふうっ、

と息をつき、上がりかけた。だが、今一度、湯に体を浸けて、

「見つかった金だがな、鯛造の覚え書きがあったで、元の持ち主を呼び出して昨日のうちに戻した」

「それは喜びましたでしょうな」

「当たり前じゃあ。盗まれた大金が六年も過ぎて手元に戻るなんぞ、どこの世界にある。利息はついておらぬがな」

最後は軽口を叩いた笹塚が、今度は元気よく湯船から上がった。

その夕暮れ前、磐音は両国橋を渡り、今津屋のおこんに袖無しを返しに行こうとしていた。

すると橋際で声を張り上げる読売屋に客が集まっていた。

「な、なんと六年も前に打ち首地獄になった押し込み一味、霜夜の鯛造の残党が南町奉行所に捕縛されて、盗まれた金が元の持ち主に戻って来たという、世にも珍しい話しだ！

さあ、買った買った」

売り声につられて磐音も一枚求めた。そして、薄暮の光の下でざっと読み下すと、思いがけない数が目に飛び込んできた。

＜……霜夜の鯛造が密かに盗んで隠し持っていた金は、なんと二千と八百七両にも上った＞

見つかった金は三千八百七十両ではなかったか。それには千両も差額があった。

（どういうことか）

笹塚に訊いてみねばと考えながら、さらに読むと、

＜……南町奉行所に呼び出された被害のお店の主たちは口々に、思いがけなくも、盗まれた金がお上の手で戻って来たと大喜びとか＞

磐音は合点がいった。

磐音がそのことを問い質したところで、笹塚から返ってくる言葉の予測がついた。

「奉行所も探索に費用がかかったでな。それに盗まれた者たちもいったんは諦めていた金だ。七割も戻れば、御の字だろうが」

磐音は、押し込んだ割きの金蔵の金を半分残していったという霜夜の鯛造の仕事ぶりをなぜか微笑ましく感じていた。

そして、蝋梅のかたわらに立つ老婆に扮したおとくを思い出して、

（おとくどの、史吉どのと一緒に幸せの道を歩くがよい）

と宵の両国西広小路に向かって胸のうちで呟いた。